書評

William I. Hitchcock, *The Age of Eisenhower: America and the World in the 1950s,* 2018
（ヒチコック『アイゼンハワーの時代』）

島田 洋一（福井県立大学教授）

アイゼンハワー政権を論じた著書は数多あるが、米バージニア大学教授（近現代史）ウィリアム・ヒチコックが作年公刊した本書は、最もバランスの取れたものの一つだろう（William I. Hitchcock, *The Age of Eisenhower: America and the World in the 1950s*, 2018）。邦訳はまだない。

アイゼンハワーの大統領期（1953年1月～1961年1月）は、前任者トルーマンの時代に収拾の目途が立たなかった朝鮮戦争とマッカーシー旋風への対応がまず重要課題だった。本書はこの部分が特に充実している。[①]

第二次大戦中の連合国遠征軍最高司令官、戦後の初代NATO軍最高司令官を務めたアイゼンハワーに有権者が何より期待したのは、「朝鮮戦争を名誉ある形で速やかに終わらせる」ことであった。アイゼンハワー自身も、それを重要公約としていた。当選後まもなく、密かにニューヨークの組閣本部を抜け出し、サンフランシスコ、ハワイ、ミッドウェイ、硫黄島を空路乗り継いで韓国ソウルを訪れて、現地の事情を軍幹部から聞いている。

アイゼンハワーの結論は、地勢的に自然な「朝鮮の腰」（39度線あたり。The waist of Korea）まで巻き返した上で休戦とするのが望ましく、そのためには中国軍の拠点への戦術核使用も辞さない、というものだった。

これをアイゼンハワーの単なる「ブラフ」とする史書も多いが、ヒチコックは諸史料をもとに、大統領は本気だったとしている。[②] 実際には、アイゼンハワー政権発足から２か月を経ない1953年3月5日にスターリンが死亡、東ドイツで民衆蜂起が起きるなど、勢力圏内の不安定化を危惧したソ連が朝鮮休戦を急ぎ、北進・核使用プランは実行に移されることなく終わった。

しかし、共産側が休戦協定を破った場合には、アイゼンハワーは核で対抗する意向を示していた（地上軍は投入しない）。また、同年12月初めにバミューダでチャーチル英首相と会談した際にも、核兵器の出現で「戦争は完全に新たな時代に入った」と考えるのは古い発想で、自分は核兵器も通常戦における一手段と見なす、と語っている。

「赤狩り」のマッカーシー上院議員とアイゼンハワーの関係は複雑である。軍の先輩で10歳年上のマーシャル（第二次大戦中の陸軍参謀総長。トルーマン政権で国務長官）まで「アカの手先」「裏切り者」と攻撃するに至ったマッカーシーに強い不快感は持っていたが、1952年の大統領選中、「共産主義を信奉するような弱い人間は政府から叩き出す。我々はその十字軍だ」と訴えたアイゼンハワーには、保守派に人気の高いマッカーシーと正面からぶつかる気はなかった。

遊説中にマッカーシー（彼もこの年、再選に臨んでいた）の地元ウィスコンシン州で壇上に並び立った際には、アイゼンハワーは原稿にあったマーシャルを称える一節を読まず（そのことをメディアにリークされた）、リベラル派や共和党内穏健派から臆病との批判を浴びた。

大統領に就任したアイゼンハワーに対しマッカーシーは、共産主義者を排除する「打率が低い」、マーシャル・プランの恩恵に与りながら共産中国と貿易を続ける欧州諸国に「女々しい宥和主義」で臨んでいる、などと非難のトーンを上げていった。反撃すべしとの声も政権内に高まったが、アイゼンハワーは「あんな男と泥仕合はしない」を口癖に、「アメリカ的フェアプレイの精神に反する反共闘争は自滅を招く」といった、一般的コメントを発するにとどめた。

それどころか、伝統保守層を意識し、マッカーシーを「しのぐ」政策も打ち出している。1953年4月27日、アイゼンハワーは、共産主義者のみならず、「性的倒錯」など道徳的問題を抱え「脅迫に晒されやすい」人物も政府機関から排除する旨の大統領令を発した。今ならＬＧＢＴ差別と、大問題になるだろう。

なお、本書も言及しているが、体制破壊志向が疑われる人間への強制捜査、予防拘禁に関する政府権限を飛躍的に高めたマッカラン法（1950年9月）の主提案者パット・マッカラン上院議員は民主党員である。推して当時の政治状況を知るべしだろう。本書は、マッカーシズムに対するアイゼンハワー政権内部の動きを丹念に追う点、類書を凌いでいる。③

著者はアイゼンハワーを大統領として評価するものの、マッカーシーと戦う姿勢に強さが欠け、アメリカ社会の分断を深めたと指摘する。またここで触れる紙幅はないが、アイゼンハワーが退任演説で警鐘を鳴らした「軍産複合体」は、他ならぬアイゼンハワーの下で成長したとも批判している。しかし本書を丹念に読み進むにつれ、そうした批判は単純に思えてくる。それだけ、バランスよくファクト・資料が提示されているということだろう。約650頁の大部の書だが、飽きさせない。

---

① アイゼンハワーの伝記としてよく引かれる次の二書は、軍人時代にかなりのページを割いている。大統領時代についてはヒチコック本が詳しく、かつより学術的である。Jean Edward Smith, *Eisenhower in War and Peace,* 2012. Stephen Ambrose, *Eisenhower: The President,* 1984.

② ダレス国務長官がインドのネール首相を通じて中国側にこの「ブラフ」を伝え、中国側が恐れをなしたといった記述が通俗本にはよく現れる。しかしブラフでもなければ、中国側の判断もダレス・メッセージとは独立したものだった、という解釈を本書は取っている。同じ解釈をダレスに焦点を当てて論じた権威ある書として、下記参照。Richard Immerman, *John Foster Dulles,* 1999.

③ アイゼンハワー政権に対するマッカーシー側の動きについては、下記が詳しい。M. Stanton Evans, *Blacklisted by History: The Untold Story of Senator McCarthy,* 2007.